

タイトル	ルーマン，意味と歴史の循環論：高橋徹『意味の歴史社会学ルーマンの近代ゼマンティック論』（世界思想社2002年）に触発されて
著者	犬飼，裕一
引用	季刊北海学園大学経済論集，58(4)：63-75
発行日	2011-03-31

## 《論説》

## ルーマン、意味と歴史の循環論

高橋徹『意味の歴史社会学 ルーマンの近代ゼマンティック論』  
(世界思想社 2002 年) に触発されて

犬 飼 裕 一

## 1. 理論への読み

ドイツの社会学者ニクラス・ルーマン (1928-98) が残した膨大な著述を読んでいく作業は、成熟し、成果を挙げるにいたっている。受容・学習の段階は終わり、展開・利用の時期に来ている。ただし、ルーマンの場合、これまでの道は平坦ではなかった。

新しい理論家の仕事を受容し評価する際にはつねに経ていく道なのだが、人々は既存の理論枠組みのどれに当てはまるのかをまず考え、「……主義者」だ、「……論」の流れだ、といった形でいったん整理箱に入れてから考える。ただし、この種の分類は曲者で、いったん共有されてしまうと、多くの人々はその線で読んでしまう。そして、それ以外の要素が無視されてしまうのである。とりわけ手軽な形で要領よくまとめられた解説書が普及するようになると、「整理」は固定化してしまう。これが「解説書」の弊害である。当人が書いた文章では所々に目立たない形で書き込まれた含意や留保、以前の自説への疑問を発見することが可能である。むしろ、優れた思索者ほど文章に込められた情報量は多いはずである。ところが、解説者の手にかかるとそれらがすべてそぎ落とされ、ある側面が「これだ!」という調子でとりだされ、それだけが強調されるからである。

ルーマンの場合、それにあたるのが、社会システム理論との関連での読み方である。タルコット・パーソンズに代表される「構造機能主義」の理論構成は、変幻自在な複雑性としての「社会」に、確固とした座標軸を定めることを意図している。パーソンズの主著の一つ『社会システム』を観察すると、「社会体系の構造と過程の分析に適した概念図式の概要を系統立てて一般化したうえで、提示しようとする試み」によって、「社会体系の理論のなかで、価値指向パターンが役割のなかに制度化される現象を中軸とする部分」を取り出そうという意図が見えてくる。「価値志向パターンが制度化という現象 (the phenomena of the institutionalization of patterns of value-orientation)」とは、動的な性質をもった「社会」における静的な部分であり、それを根拠 (定数) としてそれ以外の動的 (変数) を計測することが期待される<sup>1</sup>。

1 パーソンズは『社会システム』の中で次のように書いている。

「この書物の主題は、行為の準拠枠 (action frame of reference) を用いて社会体系 (social system) を分析するための概念図式を説明し、例証することである。それは厳密な意味での理論的な著作として意図されている。本書が直接取り扱うのは、社会体系分析の経験的一般化そのものでもないし、またその方法論

それは、何らかの不変の実体（他者に依存しない存在：定数）によって可変の現象（変数）を法則化し、法則によって説明しようとする学問観（科学観）を下敷きにしている。この場合、科学の研究対象となるのは、主に揺れ動く変数であり、これを確固とした座標軸の中で位置づけようとする。研究される変数（現象）にとって定数は外部の存在であり、外部の存在である定数を自在に操る研究者（パーソンズ自身）もまた外部に存在する公平で客観的な観察者であるとみなされる。

ここでは、研究対象の外部に存在する研究者が、同じく研究対象の外部に存在する基準（根拠）によって研究対象を研究しようとする科学観（学問観）のことを「実証主義」と呼ぶことにする。それは自然科学に出発し、最大の成功を取めた科学観である。科学者ニュートンは、落下するリンゴにとって外部であり、ニュートンが考え出した万有引力の法則もまた、落下するリンゴにとって外部でなければならない。数億光年彼方の天体を観察する天文学者は、天体にとっておそらく完全に外部である。これらと同じく、「社会」もまた外部から研究しようという信念が生じ、多くの人々が信奉してきた。それこそが「社会」をめぐる科学、社会科学であるという信念である。

パーソンズの生涯は、この科学観を社会学の領域で実証することに費やされたといえるだろう。常に相互関係の中にあり、常に揺れ動き、常にどのようにでも解釈できる「社会」を、何とか実証主義の方法で研究可能な対象へと加工しようというわけである。結果として、パーソンズは個人の行為という元来動的な現象に注目しながら、全体として静的な「システム」として社会を論じた。確かに個々の個人は日々刻々相互行為の途上にあり、動いているのだが、それらには一定の法則性があり、法則そのものは不変なのだ考える。それらを抽出し、「社会システム論」として組み立てれば、具体的な社会現象によって検証可能な実証科学となりうるにちがいない、と

---

でもない。とはいうものの、もちろんその両者をかなり含むことになるだろう。もとより、ここで提唱する概念図式の価値は、結局のところ、経験的調査におけるその有効性によってテストされなければならない。しかし、この書物は、われわれの経験的な知識の系統だった説明を試みるものではない。もっとも、そのような試みは、一般社会学の著作では必要であろうが、この書物の焦点は理論的図式におかれているのである。この概念図式の経験的な用途に関する系統だった論述は、別途に企てなければならないだろう。

基本的な出発点は、行為の社会体系（social system of action）という概念である。いいかえれば、個人行為者たちのあいだで、相互行為（interaction）がおこなわれる条件を考えると、そういった相互行為の過程を科学的な意味での一つの体系（system）とみなすことができると、また他の諸科学における別のタイプの体系に首尾よく適用されてきているのと同種の理論的分析を、それについておこなうことができる。」（Tarcott Parsons, *The Social System*, The Free Press, 1951=『社会体系論』、佐藤勉訳、青木書店1974年9頁）

かなり広く行きわたったパーソンズ批判の影響で、この人物がずいぶんと粗雑な予定調和の社会像——社会実在論——を描き出しているという理解が、時に明言されることがある。ただし、新カント派からマックス・ウェーバーさらには、オーストリア学派から新古典派の経済学の理論構成を詳細に学んだパーソンズの理論構成は、その種の粗雑な実在論ではない。むしろ20世紀前半の社会科学論の百貨店といった様相を呈している。入念に構成されたパーソンズの議論が、それらをふまえながらも、「経験的調査における有効性」という実証主義的な観点に回帰しようとする点にこそ問題がある。

つまり、解釈学や現象学の名で延々と続けられてきた古典の実証科学への批判や、対抗パラダイムを詳細に踏まえたうえで、パーソンズは、やはり「経験的調査」こそが理論研究に優先するという、簡単にいえば高度にアメリカ的、プラグマティズムの信念に回帰するわけである。この場合、肝心の「経験的調査」が理論的知見に優先することの根拠はあまり問われることはない。もちろん、この問題についてここでこれ以上立ち入るのはやめることにする。

というのがパーソンズ流の実証主義であった。

ルーマンの議論は、多くの場合、パーソンズ理論の継承、あるいは発展として紹介され、理解されてきた。当人が実際にハーバード大学に留学しパーソンズの教えを受けており、またパーソンズ理論の影響を思わせる用語法——「システム」や「コミュニケーション」など——が最重要概念として登場することも、そういった理解を補強してきた。

ただし、両者の間には理論の根幹にかかわる大きな相違がいくつもある。私見では、その最大のもの、ルーマンがパーソンズの上記のような実証主義的科学観を共有していないことである。言い換えれば、ルーマンは「社会」をパーソンズが考えるような「科学」の対象として研究することは不可能ではないにせよ、困難であると考えている。つまり、研究者が「社会」の外部から考察し、「社会」の外部に存在する理論を構成するという考え方自体が成立困難であると考えている。つまり、ルーマンはここでいう意味の実証主義者ではないのである。

近代科学に成果をもたらした実証主義に立脚することをやめたルーマンは、「システム」それ自体が自己言及・自己産出する様態を記述することを開始する。「システム」の内部には、当然ルーマン自身も含まれる。ルーマンによるシステム論の転換は、「システム」(あるいは、ごく漠然とした概念としての「社会」)を実証主義的な科学観から解放し、人文・社会科学が元来取り組んできた問題に再帰させる事業であるともみなすこともできる。とりわけ重要なのは、古くから人文科学が取り組んできた領域——いわゆる「文学部」の領域、つまり物理学的な自然科学を範例とする「科学」を信奉する人々が無視してきた領域を、再び視野に入れることである。具体的には、文学と歴史である。

とりわけ歴史は、パーソンズに代表される静的な「社会システム論」の弱点であった。歴史は歴史を根拠として動いていくからである。つまり、歴史にとって重要なことは、不変の静的構造ではなくて、常に新たに作り出される変動——パーソンズ的にいえば「動的機能」——だからである。歴史にあっては、不変の構造は無意味ではないとしても、意義が多くない。たとえば、「古代ローマ社会と古代ゲルマン社会と平安時代の日本社会には、政治権力の不均衡な配分に基づく経済的な格差が共通してありました」という命題は、ある種の社会理論ではあっても、歴史ではない。むしろ、それぞれの社会に見られる支配層と被支配層がそれぞれどのような特性を持ち、時間の流れの中で互いに影響を与えながらどのように変化していったのかを問題にするのが歴史である。どれも同じだ、とっているのでは、歴史として研究するに値しないからである。

言い換えれば、同時代の人々にとって「不変」であると思われる要因が変化していく様態を研究するのが歴史であり、歴史学なのである。つまり、20世紀中ごろのパーソンズが「静的構造」であると考えた要素が、変動していくとき、歴史の主題が発生するのである。不動であると思われた構造が動き、人々が従い依存してきた制度が改変される。そして、新たな価値観が旧来の価値を評価替えし、古くは無価値であると見なされてきた現象が、新時代の先駆けとして再評価される。しかも、多種多様な宗教やイデオロギーが闘争し、それぞれが独自の価値システムを形成する。

宗教やイデオロギーの強みは、外部に根拠を必要としないことである。宗教はその宗教自体を、イデオロギーもまたそのイデオロギー自体を根拠として循環している。その宗教の信者でない人間や、そのイデオロギーを信奉していない人間が批判しても、根拠のなさや荒唐無稽さを非難しても、宗教やイデオロギーは基本的に無傷である。結局のところ、宗教やイデオロギーを繁栄させたり衰退させたりするのは、それを信じる信者や信奉者がどれだけ確保されるのかということ

だけである。世代が替わり、新しい世代の信者や信奉者を得られなければ、衰退し、またその逆も起こる。同じことは、文学や芸術についてもいえる。宗教や芸術の歴史は、まさに循環する原理間の交替の歴史なのである。そもそも、「歴史」という知の営み自体が、循環的な性格をもつ。その場合、何が「歴史」であるのかという判断基準自体が歴史的に変化していく。つまり、歴史の根拠はあくまでも歴史だからである。

さらに「社会科学」と呼ばれるものを視野に入れると、ルーマンの議論が展開するまさにその現場に行き着くことになる。社会科学に歴史を問うことは、一見見慣れた問いの立て方でありながら、実際には深い問題が口をあけて待ち構えている。それはパーソンズのような実証主義者たちの取り組みを越えたところにある難問に正面から立ち向かうことでもある。

本稿で注目したいのは、高橋徹『意味の歴史社会学 ルーマンの近代ゼマンティック論』（世界思想社2002年）である。高橋の本が優れているのは、まさに通常の概説書を越えて、ルーマンのテキストに肉薄することで、独自の研究領域を構築することに成功しているところにある。この意味で、この本は社会学の理論的探求を取り扱ったわが国の研究の中で、まったく特筆すべき業績である。要領の良い概説の精度をあげることをもって理論研究に代える風潮が支配する中、通説を打ち破る形で独自の議論を打ち立てる仕事は、決して忘れてはならない知の営みとして推奨されるべきである。

「本書で注目したいのは、ルーマンの著作の中でも歴史社会的な性質を持つ一連の仕事である。具体的には、1980年の第一巻を皮切りに刊行されはじめた『社会構造とゼマンティック』（全4巻）のシリーズ、および1982年の『情熱としての愛』である。これらの著作は、正確には、歴史的な素材を扱った知識社会学的研究であり、その方法的な視角には彼の理論枠組みが活用されている。本書は、その研究の具体的な内容に迫り、そこから彼の理論枠組みの意味についても考察をおこなっている。そうすることで、ルーマンの仕事が、歴史的な研究と理論的な研究を繋ぐものとして浮かびあがってくるだろう。またそうした作業の中で、現代的な理論枠組みと歴史的な素材とがどのように結びつけられたのかを明らかにすることにより、ルーマンの仕事、歴史社会的な研究のひとつとしてこの分野の新たな研究事例の蓄積に加えることができるはずである。」（高橋3-4頁）

知識社会学が「歴史」という課題を引き受けるとき、ルーマンの議論はいきなり問題の核心に入っていく。字義通りに解するならば、知識社会学は「知識」を研究対象とする社会学でなければならない。ただし、社会学自身もまた知識である以上、知識社会学の対象とならざるをえない。「知識社会学という設定が含意するのは……観察者であるみずからへのリフレクティヴィティを不可欠の要素として孕んでいる」わけである（高橋11頁）。しかも、この場合の知識社会学は時間の経過で変化していく歴史的素材を扱う。

歴史の知識社会学がはらんでいる膨大な自己言及的・循環論的な論理は、それを無視して取り扱うならば、どうしてもよい屁理屈、あるいは議論のための議論、言葉遊びの類であると見なされるのかもしれない。とりわけ実証主義的な志向をもった人々にとってはなおさらだろう。現に「知識社会学」を掲げて一時代を築いたカール・マンハイムは、「知識の存在拘束性」を掲げて半ば実証主義的な手法で「知識」を取り扱っていた。つまり、マルクスが「イデオロギー」という言葉で語ったように、「知識」にはそれを生み出した社会的条件が基盤としてあり、社会的条件から知識を説明することが社会学として可能なのだと考えた。マンハイムの場合、研究対象としての「知識」と、それを論じる社会学は別物の知識であり、特定の知識を共有しあっている人々

とそれについて論じる知識社会学者もまた別人である。つまり、研究対象である「社会」や「知識」と、研究者である知識社会学者（マンハイム）や知識としての知識社会学は、相互関係が排除されている。言い換えれば、「社会」の外部に存在する知識社会学者が、「知識」の外部で独自に構成した理論によって研究を行うのだというわけである。つまり、マンハイムにとって知識社会学というのは特別製の知識なのである。さらにいえば、天上界にいる神のような視点で、地上（社会）にうごめく人々が信奉するイデオロギーやユートピア思想を「知識社会学」として研究するかのようでもある。現に、マンハイムは自分自身を称して「自由に浮動する知識人」と呼んだ。

それは知識社会学が本来はらんでいられる自己言及的性格に蓋をして実証主義的な研究姿勢を保持しようとする態度であると解することができる。知識人が考え出した「知識」（思想、哲学、学問、宗教、イデオロギー、芸術、文学、他）について、同じ知識人であるはずの知識社会学者（マンハイム）が、なぜ自分だけ特別な存在でありえるのか。特定の知識を他者として外化して論じるにあたって知識社会学者が考え出した根拠もまた同じく「存在拘束性」の下にあるのではないのか。そもそも、イデオロギーについて論じる知識社会学自体がイデオロギーなのではないのか。さらにいえば、研究者と研究対象を勝手に区別する考えそのものを外部で根拠づけるのは何か。もしもそれがなければ、実証主義的な学問観自体が内部で循環しているのではないのか。必死に蓋をしても知識社会学が抱える自己言及の危険性は決して消え去るものではないのである。それは、とりわけ実証主義的な論者にとって、自ら自身の足場を掘り崩してしまう危険なのである。

高橋の仕事が意義深いのは、ルーマンの「知識社会学」が抱え込んでいる危険を十分に認識した上で、「歴史」を論じる視点——あるいは方法——を確保しようとしているところにある。

## 2. ゼマンティックと反照性

高橋が目するルーマンの知識社会学的著作が考察対象としているのは、高橋の本の副題にもあるように「ゼマンティック (Semantik)」という概念及び問題である。ゼマンティックとは、高橋の説明をそのまま借用すると、「ある社会において個々のコンテクストから比較的独立して首肯性を持つような意味 (Sinn)、具体的にはある社会で、一定の首肯性を帯びた思想・観念・概念、さらにはある種の感受性や行動様式を含む」（高橋4頁）ものである。そして、「ルーマンは、これらを思想財 (Gedankengut)、あるいは観念財 (Ideengut) と呼ぶことがある。これらの思想財・観念財は、当該社会において歴史的に蓄積され、育成されたものであり、それらが新たなコンテクストのもとで、意味の変容を伴いつつ再利用される。したがって、ルーマンにおいて Semantik という語は、特定の研究分野やその方法を表すよりも、彼自身が研究の対象としている文化史的な素材 (kulturgeschichtliches Material) を表している」（高橋4頁）。

「文化史的な素材」としてのゼマンティックは、それぞれが歴史的な前提の中で生きていかざるをえない人間が、日々相互にコミュニケーションをおこなっていく際の手持ち資産の総体である<sup>2</sup>。すでに言い古された言語論——いわゆる「言語論的転回」後の議論——でおなじみのよう

2 この本の別のところで高橋は次の説明もおこなっている。

「ゼマンティックの原語は Semantik であり、序章でも述べたように、本書ではこれを意味論とは訳さずに、ゼマンティックと訳している。なぜなら、ルーマンにおいて、ゼマンティックは複合性の増大した社会において機能するコミュニケーション財のことを意味しているからである。つまり、ルーマンの場合、単に概念の歴史的な意味内容やなんらかの方法論を持ったディシプリンの表示を意図しているというよりは、コン

に、記号としての言語は個人の所有物ではない。人々は時間の流れの中で常に動いているゼマンティックを入手して活用しているにすぎない。人間は自分が言語を使って思考していると信じているのだが、実際には、同時に他人と共有しあっている言語によって思考させられている。しかも、人間は他者との相互関係の中で新しいゼマンティックを手に入れては自らの思考を変更していく。その上、変更の過程はしばしば本人にとって無意識である。たとえ本人には無意識であったとしても、特定のゼマンティックはそれ自身として展開していく。ゼマンティックの外部に特定の根拠を仮設することはできるが、外部にある根拠がゼマンティックを一方的に規定するといった実証主義的な論理は、この場合否定されなければならない。人間は特定の外的事例について言語を用いているのと同時に、言語——ゼマンティック——によって外的事例について特定の認識をさせられているからである。ゼマンティックの根拠はそのゼマンティック自体だからである。

ただし、ルーマンの考えでは、「意味論（ゼマンティック）」や思想史、哲学史、あるいは概念史といった領域を研究する歴史家たちは、上記の古典的知識社会学（マンハイム）と同じく、実証主義的な論理の内側で詳細な専門知識を蓄積しているにすぎない。

「ルーマンは、『社会構造とゼマンティック』シリーズ第1巻の冒頭論文「全体社会構造とゼマンティック的伝統」において、コゼレック<sup>3</sup>らの研究にもふれつつ、みずからの問題関心、および方法的な道具立てについて論じている。近代社会に関する歴史的な知識社会学研究という性格を持つこの一連の論集の冒頭にあるこの論文において、ルーマンは、まず啓蒙の知がみずからを反省の対象とすることを回避してきたことを問題として取りあげ、ついで知識社会学が提起した知識の帰属問題についてふれている。そうした知識社会学的議論の論脈からすれば、みずからの営みに対するリフレクティブな態度がもはや欠くことができないにもかかわらず、（哲学史家や科学史家を含めた）歴史家たちは、「歴史的・政治的意味論に基づいた仕事に取りかかっている」<sup>4</sup>」（高橋 24 頁）

ここに今日に至る歴史学が理論的な側面で抱えている難問が端的に出ている。つまり、歴史学と歴史家は、「歴史」という対象を自分たちが生活する社会の外部に存在する実体として取り扱っているのである。言い換えれば、今日の歴史学は実証主義科学の一員として、「史実」を、自然科学者が究明するように究明しようとする。その場合の根拠は、「事実（史実）は事実である」ということである。たとえば、「カエサルが暗殺されたのは紀元前 44 年である」という事実は、研究者集団の外部にある。それは、今日の誰であろうとおそらく否定しないだろう。そして、この種の事実の外部性を根拠にして、否定できない事実（史実）を積み重ねていけば、それで実証主義的な「歴史」が成立し、科学として高度になっていくのだという信念である。それはちょうど地球外の天体についての事実を果てしなく蓄積していけば、天文学という科学が成熟していくという考えと同じである。

ティンジェントなコミュニケーションを一定の首肯性のもとに安定させる諸観念、諸思想の機能が問題となっているからである。」（高橋 21 頁）

3 ラインハルト・コゼレック (Reinhard Koselleck 1923-2006) は、ドイツの歴史家で歴史理論 (Historik)、概念史・言語史、そして「意味論 (Semantik)」の第一人者。ドイツ社会史の中心の一つ「ビーレフェルト学派」の代表者の一人。高橋の本にも登場する膨大な編著『歴史的基礎概念 ドイツにおける政治的・社会的言葉の歴史的辞典』全9巻 (*Geschichtliche Grundbegriffe - Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache* 9 Bde. Stuttgart 2004) がライフワークである。高橋 5 頁以下参照。

4 Niklas Luhmann, *Gesellschaftsstruktur und Semantik*, Bd.1, 1980, 13 頁。

ただし、天文学と歴史学の間には大きな相違がある。天文学については、蓄積された知識に対して研究者集団の外部性が比較的容易に確保できる。これに対して歴史学の場合は、どのような事実(史実)が研究に値するののかという点で、すでに完全に研究者集団の総意に依存している。研究者集団の総意が変化すれば、「外部」であるはずの史実も入れ替えられてしまう。個々の史実は確かに研究者の外部であるとしても、「いままで見向きもされなかった史実が再評価される」という過程は、完全に研究者集団の内部の問題である。ここから比較的短い期間に次々と入れ替わっていく歴史学界の流行が説明できる。取り扱っているのははるか昔の史実なのだが、それについて論じる歴史学はまるで家電製品のように耐久年数が短い。扱っているのは千年前の話でも、20年前の研究が「あのころはこういう説明が流行ってましたね」ということでひどく古風な印象になってしまう。ちょうど一昔前の自動車のデザインが年長者の郷愁を誘うような具合である。この点は、ガリレオ以来「外部」の知識を営々と積み重ねてきた天文学とは比べようがない。

「この点に加えて、ルーマンは、社会の変動と意味論的な変化の相関関係に関する回答が方法論的にも、理論的にも満足のかたちでみだされておらず、その結果、概念・思想と社会の関係について研究することで「知識社会学の後継者の地位についてしまっている歴史家たちによって、理論的な主導ラインを欠いたまま高度な事実研究」が進められている実情もまた問題をかかえているとみている。なぜなら、そうした研究においては、意味論上の変動がなんらかの一般的趨勢に関連づけられて考察されてはいるのだが、意味論上の変動とそれを規定する要因との連関に関する理論的説明が用意されていないからである。ルーマンによれば、この点において代表的なのはドイツにおける「旧世界の崩壊と近代世界の成立」に伴う諸概念の意味論的变化について研究しているコゼレックらによる『歴史的基本概念』事典の問題設定である。」(高橋 24-25 頁)

社会学としての知識社会学と、歴史学としての思想史(概念史)の間の緊張関係は、ほとんど宿命的なものである。突き放した地点からいえば、ルーマンの「方法論」や「理論」を満足させる議論を展開してから「高度な事実研究」を行うということが現実的なのかという実用上の問題がどうしても気になるところである。逆にいえば、ルーマンの「方法論」や「理論」は、ルーマンの仕事なのであって、歴史家の仕事ではないともいえる。もちろん問題は社会学と歴史学(社会史)の間の緊張関係そのものである。理論志向が強い社会学と事実志向が強い歴史学の間相違は、それに取り組む人員の性向とも深く結びついており、互いに言い分が十分に蓄積されているのも間違いない。

ただし、視点を変えていえば、社会学と歴史学の相違点、あるいは古くからの対立点とは別の論点にルーマンが移行していることに注意を向ける必要がある。それは「高度な事実研究」を優先する歴史学者とも、従来の社会学とも異なった立場である。すでにパーソンズの社会学理論を見てきたように、理論を重視する社会学もまた実証主義的な科学観を強固に保持してきた。つまり、歴史家は史実を外部的存在として特定し、社会学者は社会をみずからの外部に存在する事実として一方的に研究することが可能であると考えてきた。

たとえば、社会学者(パーソンズ)の「理論」は、「経験的調査における有効性」によって検証される必要があるというわけである<sup>5</sup>。この場合の「経験的調査における有効性」というのは、社会学理論を構想する人物にとって外部に存在する根拠であり、決して当該の理論によって影響

5 「経験的調査における有効性」については、注1の引用文を参照。

を受けたものであってはならない。もしもそんなことがあれば、理論と経験的調査の間に循環関係が生じてしまうからである。「やらせの調査」、つまりあらかじめ特定の理論に有利な結論が出るように仕組まれた調査によって、その理論を検証したふりをしているということになってしまうからである。まさに、これこそが実証主義科学が最も警戒し、忌避しなければならないとされる事態である。研究対象の外部性の確保。まさにこれこそが実証主義の倫理（モラル）の最優先課題である。

しかし、ルーマンのような理論家は、この種の課題が実現可能なのかを疑う。天文学や物理学に代表されるような自然科学は別として、同じ人間である研究者が、人間とその社会を対象とする社会科学において、研究対象の外部性の確保などということが本当にできるのか。実際には、不可能なのではないのか。むしろ、実証主義的な社会学と手を切ったルーマン流の知識社会学は、研究者自身の存在をも反照・反映する性質（リフレクティヴィティ）を念頭において理論構成をおこなうべきなのではないのか、という洞察が生じてくるのである。

このように考えてくると、ルーマンの歴史社会学と知識社会学が位置する地点がかなり明らかになってくるのではないだろうか。それは反照性（リフレクティヴィティ）を視野に入れ、反照性、つまり循環性を根拠として自己産出していく「社会学」の一環としての歴史社会学と知識社会学である。

「歴史に関する現在の議論を考慮すれば、歴史社会学は、純粋な実証的歴史社会学としてのみ確立しうるものではない。ルーマンの歴史社会学的研究が、あくまで知識社会学研究として遂行され、みずからへのリフレクティヴィティを組み込んだものであることも同様の認識を示すものである。少しでも確からしい「事実」をその限界とともに明らかにする誠実性と、「事実」の確からしさに安住せず、「事実」を作り出すみずからへの問いかけをやめることのない誠実性とをどのように結びつけてゆくのか。同時代の諸現象に取り組む他の社会学的研究とともに、歴史社会学もまたこうした課題をさけて通ることはできないのである。」（高橋 47頁）

年来念頭から去ることのなかった問題意識を、見事、明晰かつ、必要にして十分な言葉で表現してくれた高橋に、ここで感謝したい。私見では、まさに「「事実」を作り出すみずからへの問いかけ」こそが、ルーマンをルーマンたらしめている最大の特性である。それは自己言及し、循環することで日々作り出されている——当人も、作り出している——「事実」が、新たに創造する学問の可能性を暗示している。それは、「外部」に依存することで成立する実証主義科学とは、明らかに別物の知の営みである。

科学（学問）も含め、人間の知の営みが、究極的には循環的・自己言及的に成り立っている状況は、自分自身を特権化し、自己言及の危険を不当に回避してきた従来の知的世界に反省をもたらすものである。それは、これまでほとんど真面目に問われることのなかった問いである。今まで問われることのなかった問いのありかを指し示すこと、まさにこれこそが、ほかならぬ理論の役割なのではないだろうか。

日々相互に関係し、互いの利益を慎重に調整しあいながら生きている人々が「社会」をつくっている。そこでは変動・動態こそが主人公であり、不動の静的な「主体」は例外的な存在である。ところが、実証主義的な科学観は、「社会」の外部にあってなぜか不動の静的な主体である研究者（科学者）を中心に展開してきた。究極的には、特権的な地位を主張する研究者の「主体」の独語をいかに成り立たせるのかということに学問そのものの重点が置かれてきたのである。問

題は、やはり古くから科学（学問）を支配してきた実証主義に収束することになる。

### 3. 歴史と理論の分離とは？

客観的で中立な根拠によって事実を検証する、実証主義的な科学観は、まさに今日の世界の常識としてほとんど不動の地位を維持している。それに文句をつけるのは、一部の科学哲学者やルーマンのような社会学理論家だけである。その証拠に、元来実証的な手続きで成り立っていない対象を取り扱う人文科学——哲学、文学、芸術学、歴史学——ですら実証主義が事実上の基準（デファクト・スタンダード）として通用している。より実情に近い言い方をするならば、実証主義は多くの人々に、安心できるよりどころを提供している。逆にいえば、これがなくなればすべてがひどく不安定で、不確実なものに思われてくる。このことは、実証主義的な科学観や研究方法への疑問や問い直しに対する、各方面からの予想外に激しい敵意とも通底している。

「哲学」の研究者の主な仕事は、有名な哲学者が考えた「真正な……思想」を文献学の範囲で実証的に明らかにすることであり、「文学」の研究者の多くが取り組んでいるのは、有名な作家の創作を当人の生活史によって根拠付けることである。美術や美術史、音楽や音楽史を研究する「芸術学」も、「芸術」を芸術の外部に存在する根拠によって根拠づけようとしているように見える。芸術家が生活した時代の状況や歴史上の事件によって、個々の作品を還元的に説明しようという議論がそれである。つまり、いかようにでも解釈することが可能な「作品」を離れて、万人にとって承認可能な外部の根拠によって、自分たちの学問を根拠づけようというわけである。

素朴な個人的印象を記せば、彼らは「作品」を根拠に足るものとして信用していないのではないのだろうか。もちろん、「歴史学」もまた、「歴史」を信用していないようにみえる。芸術作品は芸術自体を根拠として循環し、歴史は歴史自体を根拠として循環しているにもかかわらず、それらの研究者（科学者）は、芸術や歴史の外部に根拠を求めようとする。循環を断ち切り、循環論を排除して、研究者と研究対象からなる直線的な科学観を守り通そうとしているのである。つまり「作品」は、常に何らかの外的な根拠づけなくしては成り立たないという芸術観や歴史観がここにある。

確かに特定の根拠づけ、あるいは政治的な主張や作者の個人的な生活を濃厚に反映した作品はたくさん存在する。絵画でいえば、交通安全や火災予防を意図するポスターは、確かに警察や消防署の意向を「根拠」としてはじめて成り立っているものである。テレビのコマーシャル・ソングも同じである。国政選挙が近づくと俄然色めき立つ新聞の「論説」も同じように説明できる。しかし、その半面で「高度な」とみなされる「作品」の多くが作品それ自体を根拠として成立していることも否定してはならない。

たとえば、指揮者のレナード・バーンスタインが1950年代末からおこなっていた若者向けクラシック音楽入門音楽会「ヤング・ピープルズ・コンサート（Young People's Concerts）」に有名なエピソードがある。バーンスタインは、冒頭でオーケストラを指揮してロッシーニの『ウィリアムテル序曲』（初演1829年）を演奏する。演奏後、会場にいる若者に問いかけて、この音楽が表している情景は何でしょうと尋ねると、多くが西部劇のテーマ音楽だとの反応で一致。ただし、実際には、この音楽は西部劇とは何のかかわりもない。おおよそ作曲者も作曲されたオペラ作品も西部劇とは無関係であり、オペラの原作であるシラーにいたっては西部劇の元になっている史実よりも古い人物である。しかし、会場にいたアメリカ人の若者はこの音楽を「西部劇」と

結びつけて鑑賞する。

この場合、音楽史の事情に通じた人がアメリカの若者のヨーロッパ文化に対する無知を非難することはありうる。特定の作品に特定の背景や根拠を対応させようとする実証主義的な立場にたつならば、若者は間違っているからである。しかし、その種の「正しさ」がロッシーニの音楽にとって根本的な問題なのかというと、そうではない。ついでにいえば、新しい西部劇映画を作って、ロッシーニのこの曲をのせれば、立派に西部劇の音楽になりうるのである。そして、その映画を観た観客が、同じ曲を聴いて映画の場面をまざまざと思い浮かべれば、映画の見方として間違っているとはいえない。もちろん、この場合も新しくつくられた映画は、ロッシーニの曲の「根拠」とはなりえない。さらにいえば、作曲者のロッシーニ自身がシラーの原作を意識して作曲の筆を進めたのは事実であるとしても、それをもって音楽そのものを根拠づけることなどできない。つまり、ロッシーニの曲は作曲されてから百年以上を経て外国で演奏されても、オペラから切り離されても、それ自体を根拠として「作品」として成り立っているのである。むしろ、それ自体として成り立ちうる曲こそが、「名曲」と呼ばれてきたといえるだろう。

もちろん「芸術のための芸術」という言い方が古くから普及してきたように、芸術は他の領域に比して自立性が高い。芸術の根拠は芸術であると主張したところで、多くの芸術家は決して反対はしないだろう。現に、大衆の嗜好から遠く離れた「実験」に取り組んでいる「現代音楽」のかなりの部分は、まさにそれ自身を根拠として循環しているとしか説明しようがないし、実作者たちも胸を張ってそうだと主張するだろう。

これに対して、歴史の領域は、はるかに多くの「根拠」が外部に存在する。それは特定の史実を根拠にして政策を正当化しようとする政治勢力の意図であるし、また国家間の「歴史問題」でもある。性差別の問題に注目が集まると、古代ローマの性別役割分業が詳細な史実として登場する。多少時代をさかのぼれば、ルーマンの故国ドイツでも、19世紀後半の国家統一事業期には、ビスマルクを思わせる古代ローマの英雄の事跡が盛んに論じられたものである。有力政治家の活躍に関心が集まれば、その種の人物の先例が歴史に求められ、性別の問題が注目されるとそれに応じた史実が研究される。この種の過程だけを観察していると、まるで歴史などは現代社会の単なる説明手段、正当化手段でしかないように思われてくる。要するに、「社会情勢」という名前の顧客の体に合わせて史実を切り貼りし、注文の背広を仕立て上げるのが歴史の仕事なのだというわけである。

ただし、その種の刻々移り変わっていく外部の「根拠」そのものが歴史であると考えれば、話は変わってくる。史学史という領域がある。いわゆる「社会学の社会学」、あるいは知識社会学と同じく、自己言及的な研究領域で、歴史が歴史を根拠として再生産されていく過程を問題にする領域である。過去の歴史上の歴史家が歴史とは何か、何が歴史的であるとみなしていたのかを考えることは、もちろん高度に歴史的な思考である。さらに議論を広げていけば、何が歴史的であるのかという問いは、高度に理論的な問題でもある。つまり理論そのものが時間の経過で変化していくからである。現に全盛を誇ったパーソンズ理論が、今日では古風な理論の仲間入りをしつつある。その後流行したハーバマスの議論にも当時の勢いはない。

ここまで議論を進めてくると、本稿の思考を触発してくれた高橋の『意味の歴史社会学 ルーマンの近代ゼマンティック論』に感謝しつつも、一つの疑問を呈する必要がある。それは歴史(実証的事実)と理論の二項対立への疑問である。端的にいえば、「理論」はそれだけで分離できるのか、という疑問である。この問いは、高橋の議論にとっては些細な問題なのかもしれない。

しかし、少なくとも本稿の筆者にとって重要なものである。つまり、それ自体が「知識」でもある理論は、いかにして歴史的な背景から分離しうるのかという問いである。

私見では、今日の社会学界に広く普及している理論と実証を区別して考える立場は、強度に実証主義的な発想に基づいている。つまり、研究者が「外部」に存在する研究対象を分析するための仮説として「理論」を提示し、経験（実験）科学的な手法で仮説を検証するという過程からなる科学観である。そして、理論に取り組む人々は、机の上で抽象的な議論について思いをめぐらし、実証に取り組む人々は各々のフィールドに向かって調査に精を出す。もちろん、これは決して社会学が作り出した分業ではない。むしろ、自然科学の研究が、「理論系」と「実験系」ということで長年にわたって続けてきた制度でもある。

理論と実証、あるいは理論系と実験系と呼ぶにせよ、この種の分類には、研究者が研究対象の外部に存在するという前提が介在している。つまり、理論を考える人々は研究対象から完全に分離した地点で思考しており、そうやって考え出された理論を実地で工夫を加えながら実証するのが実証家の役割ということになる。つまり、実証家は理論家とは異なって研究対象と切り離されているわけではないが、その代わりに研究対象とのやり取り——相互作用——の中で理論の有効性を検証する役割を果たすと考えられる。

分業の成果は他のところにもある。それは自己言及性への対応である。研究者と同じ人間が行っている行為を研究する場合、研究者と研究対象の相互関係は避けられない。研究対象を研究することは、必然的に自分自身について研究することでもある。しかも、その種の省察が日々の研究活動にも影響を与える。経験を積んだ社会調査者がしばしば述懐するように、調査は被験者との共同作業なのである。それはもちろん臨床の医師や心理学者の実感でもある。これに対して、理論は実証や臨床の現場で起こる相互関係や自己言及の過程から切り離されている。理論は現場との相互関係から守られて自立していることができる。こうして研究対象はあくまでも「外部」として理論と対面し続けるのである。

同じことは「理論」と「歴史」の区別についてもいえる。つまり、理論を担当する人と、歴史（史実）を担当する人とが分業体制を築き、理論を実証するための素材として歴史上の史実を調達するという関係である。私見では、今日「歴史社会学」を掲げる人々の多くは、この種の考えに基づいている。つまり、「理論」の外部に存在する「歴史」を使って理論を検証することや、研究対象としての「歴史」を「理論」の視点で一方的に分析することを、主な関心とする「歴史」の「社会学」、まさに連字符付きの「歴史=社会学」である。これは、「歴史」をも、実証主義的な科学観の中にきちんと整理してはめ込む作業だとみなすこともできる。

この作業は、時間の経過を度外視するか、あるいは拒否する実証主義の古くからの理念とも合致する。研究対象の外部にある「理論」は不変であり、普遍的でなければならない。理想は不動の理論が緻密さや完成度を増していくことである。いかなる時代のいかなる地域にあっても同一の原理が適用可能で、すべてが同一の基準で測られ、評価される、まさに実証主義の理想がこれである。繰り返せば、そのためにも「理論」と、「歴史」や「実証」は分断されていなければならないのである。

私見では、この種の分断関係を問い直すことにこそルーマンの議論の意義があるように思われる。つまり、理論自体が「外部」との間で相互作用的・自己言及的に変貌していく過程、あるいは自己言及によって再生産——自己産出——されていく過程こそが重要であるように思われるからである。もちろんこの問題は高橋自身がすでにルーマンに読みとっている内容でもある。

「そうしてみると、ルーマンのこうした学問的展開自体、いわば新たなゼマンティック構築の試みだとみなしうるだろう。いうまでもなくそれは、機能的分化という全体的潮流に、より特定して学問システム（そして、その中での社会学）の分化の進展に接続するものである。こうして我々は、ルーマンの理論自体をもひとつの歴史的な思想的所産とみなすところへ導かれるのである。その実像を明らかにすることは、本書全体として取り組む課題であるが、一度そういう視点にたってみると、ルーマンの社会システム理論と人間学の関係は、我々にとって、この理論自体のゼマンティック的位置を読みとる手がかりになるのである。」（高橋93頁）

ひどく手前勝手な印象を恐れずに個人的な見解を述べれば、ルーマンの中に意味と歴史の循環論を読みとることは、実証主義的な科学観への問い直しとして有効なのではないだろうか。それは本来ならば相互に関係している現象を、あるいは相互的に自己産出している現象を強引に分断する科学観への問い直し、あるいは分断されたものを再統合する知的試みでもある。

意味と歴史の循環論は、循環を断ち切ろうとする立場を相対化する。高橋の議論に戻るならば、ゼマンティックは、ゼマンティックを対象化しようとする立場そのものも飲み込んで自己産出していく。その際に、最初の獲物となるのは、「みずからを反省の対象とすることを回避してきた」とルーマンが指摘する「啓蒙の知」である。それは本稿で論じてきた実証主義的な科学観と不可分のものである。「啓蒙の知」は、自分が対象に対して特権的な地点に立っていることを主張することに出発する。啓蒙専制君主の支配下で無知な状態から目覚めつつある一般庶民——「臣民」——は、特別に開化した知識人の手で導かれ、理想の「市民社会」を建設しなければならない。すべてを知っているのは知識人であり、羊の群れのような一般大衆は知識人の賢明な方策で指導されるべきであって、羊が牧人に影響を与えることなどあってはならない。牧人と羊は分断されていなければならないからである<sup>6</sup>。

6 高橋は、歴史家コゼレックに対するルーマンの批判をつぎのようにまとめている。

「コゼレックらの研究においては、旧世界から近代世界への転換が、民主化、時間化、イデオロギー化、政治化といった観点のもとで把握されている。その際、対象となっている（先の例でいえば、「国民」・「身分」・「階級」といった）観念財は、そうした諸々の趨勢をコンテクストとして考察されるにとどまっている。それゆえルーマンにとっては、つまるところ、『社会学的な理論が、いまだ十分に展開されていないがゆえに、歴史家は、フランス革命とか、近代国家とか、ブルジョワ社会といった、それによってあの転換期自体が実現への道を手にした諸概念を手がかりにするほかないのである』。つまりそれ自体説明されるべき歴史的な事実や概念が記述のために用いられているということである。」

まさに近代史学の要点、あるいは弱点がこれである。要するに、「フランス革命の意義は近代化のきっかけであったことにある」と説明する一方で、「近代化はフランス革命の結果生まれた社会の変化である」という説明が同時に行われてしまう。もちろん、実際の歴史叙述はもっと複雑な説明が付け加えられるのだが、枝葉を取り去ってしまうと、この種の説明の骨子が見えてくる。つまり、「フランス革命」や「近代国家」や「ブルジョワ社会（市民社会）」という概念が交互に互いを説明しあう循環論法が、「近代史」という名称のもとでつけられてきたわけである。その一方で、「フランス革命の功罪」や「近代国家の光と影」などについて熱心に論じる歴史家たちも、上記のような循環論法で語られる「近代史」について疑問を抱くことはほとんどない。説明が見事に循環しているからである。

ただし、この種の循環論法を指して、「科学として間違っている」と断定するのは、実証主義的な科学観に立っていることを表明することでもある。むしろ、私見では、その種の循環が「近代史」を再生産してきたのだとそのまま捉えてから議論を再開したほうが実り多いように思われる。そもそも「近代史」、あるいは歴史学全般が、外的な要素によって因果的に既定されている必要がなぜあるのか、という問題も考えてみるべきだろう。ただし、この問題については稿を改めて論じていくことにしたい。

もちろんその種の「啓蒙の知」による賢人統治が挫折することはいうまでもない。現に 20 世紀は、知識人による社会設計、経済計画、「啓蒙の知」の残骸が累々と折り重なった墓場の世紀となった。そして、墓場に転がる残骸も飲み込んでゼマンティックが再生産されていく。もちろんその一環をなしているのが、ほかならぬルーマン自身である。ここまで考えてくると、ルーマンとともに循環する意味や歴史の循環論こそが、それ自体「ゼマンティック」として考察対象となりうるのではないのか、という考えが浮かんでくる。

ゼマンティックとしてのルーマンを考える場合、忘れてならないのは、「システム」という概念である。それは、もちろんパーソンズ流の実証主義の色合いが濃くしみついた「システム」という概念を定義しなおす過程でもある。「システム」は、決して研究者が望遠鏡で眺めたり試験管に入れて観察したりする対象ではなく、その中で日々自己言及する過程である。研究者もまた、「自由に浮動する」のではなく、その中に取り込まれており、みずからもまた対象を作り出している。言い換えれば、パーソンズやマンハイムは社会を研究していただけではなく、自分流の社会を作り出していたともいえるし、もちろんそのような研究者——知識人、理論家——として、自分たちが生み込まれた社会によって作り出されていたともいえる。

「このように社会的なものを独自の領域としていかに定式化するかということは、社会学にとって当初からアクチュアルな問題であったとあってよい。ルーマンは、「オートポイエーシス、行為、コミュニケーション的意思疎通」において、次のように述べている。「今日、世界は、いわば『下方に』開かれたもの、底のないものとして現れている。基本的要素と考えられるものはすべて、それ以上分解することができるのである。分解が徹底しておこなわれうるかどうかは、単に認知的および技術的な能力の問題なのである」。ルーマンは、こうした還元可能性にもかかわらず、世界の中になんらかの統一体が形成されるための理論的な根拠を、自己言及 (Selbstreferenz) においている。ルーマンによれば、自己言及は「きわめて一般的なシステム形成の原理」である。この自己言及がいかなるかたちで実現され、またそれがいかなるかたちでリアリティの基底に据えられているかによって、「世界を観察する非常に多くの異なる諸可能性が存している」。ここで述べられているのは、自己言及が固有のシステム形成の原理となっており、この自己言及の現実化の様々な形態に準拠して、世界は各様に観察されるということである。」(高橋 168 頁)

もちろん、ルーマンの場合、「観察」もまた注意を要する概念である。もちろん、上空はるか彼方の地点から地上を眺める研究者による観察ではない。それは、観察する自分を観察する自分がいて、これまた観察する観察者がいて、それがさらに観察される過程が連鎖する。

そして、ルーマンの自己観察を観察する作業が高橋の優れた研究をきっかけとして、また循環を開始することになる。もちろん、この循環の輪の中に一旦足を踏み入れると、抜け出すのは難しい。さらなる展開がどこに向かうのか、大いに期待される場所である。

(2011 年 1 月 15 日)